



地元の生徒に向けた野外体験教育研修。金沢大学国際担当理事・副学長(当時)も現地を訪れ、参加した



上:コパンリナスでの第三国研修。他国の取り組みから学ぶことは多い/右:ティカルに関わる複数の関係者が同じ研修に取り組み、さらにより関係が築かれた



上:マヤ地域の熱帯雨林に棲む動物の絵で壁面を彩るワークショップ。景観も美しくなると同時に、子どもたちがティカル国立公園の動物相について知る機会となる/下:コミュニティ緑化プログラムでは、住民に環境を守る意義を理解してもらい植樹を行った



フィールドワークとしてティカルを訪れた金沢大学の学生たち。子どもたちのワークショップのお手伝いをした

## 文化資源学で取り組む ティカルの観光開発

金沢大学国際文化資源学研究センターは、2014年からグアテマラ共和国でJICA草の根技術協力として観光開発を行ってきた。17年からは次のプロジェクトが始まり、長いスパンでの支援となっている。

文●久島玲子(編集部)



### 金沢大学 国際文化資源学研究センター

#### PLAYER'S PROFILE

2011年2月、金沢大学人間社会研究域付属の研究施設として発足。世界各地で変化を余儀なくされている有形・無形の文化遺産を「文化資源」ととらえ、総合的・多角的な研究・保護・活用法の開発を行う。「形態文化資源部門」「伝承文化資源部門」「文化資源情報部門」の3部門で構成され、相互が有機的に連携して研究を進めている。世界的な研究拠点を目指すと同時に、学生の教育や若手研究者の養成にも力を注いでいる。

■石川県金沢市角間町 ■TEL:076-264-5785 ■http://crs.w3.kanazawa-u.ac.jp/



遺跡の説明をする中村さん

「1970年代頃、考古学の分野にパブリック・アーケオロジ、直訳すれば「公共的な考古学」という考え方が生まれま

す。考古学を専門家だけのものとするのではなく、社会の中での考古学の役割を考えていくものです。金沢大学国際文化資源学研究センターの形態文化資源部門ではその考え方に基づき、遺跡などがある地域やコミュニティと大学が連携し、研究の一翼を担ってもらい、さらには地域の観光資源として文化遺産を活用することなどを研究しています」

文化資源学についてそう説明してくれたのは同センター教授の中村誠一さん。2014年6月から17年3月まで金沢大学が取り組んできたJICAの草の根技術協力事業「世界複合遺産『ティカル国立公園』の保存と活用を通じた住民の生活向上支援プロジェクト」では、文化資源学の研究の一環としてティカルの観光開発に協力してきた。中村さんはマヤ遺跡の専門家として、このプロジェクトの中心となって進めている。

#### 金沢大学としても 幅広く協力

ティカル国立公園は、マヤ文明の中心都市の遺跡とその周囲に広がる約570平方キロメートルの豊かな熱帯雨林からなっていて、世界複合遺産に登録されている。グアテマラ随一の観光地で、年間20万人を超える観光客が訪れるが、そのほとんどが遺跡観光をするだけで、近隣の村が経済的に潤うことはなかった。また、国立公園内での地元の雇用も少なく

生活のために不法伐採や密猟、盗掘に手を染める住民も少なくなかったそう。

そこで、ティカルでの観光業が生活向上につながるプログラムを遺跡に近い三つの集落で実施した。ガイドの養成、木製品などのお土産品作り、また女性を対象とした遺跡からの出土物を修復する技術の研修、地元の小学生に向けた遺跡学習などを通して、遺跡に対する住民の意識に少しずつ変化が生まれてきている。

集落を素通りしていた観光バスに停まってもらったために、共同組合を組織して道路沿いにカフェテリアを作りはじめた女性グループも生まれている。

その成果を受けて、2017年6月からスタートしたのが「ティカル国立公園への観光回廊における人材育成と組織化支援プロジェクト」だ。

「今はプロジェクト終了後を見据えて、観光業のリーダーとなる人材の育成や取り組みの組織化などを主眼にしています。対象の集落をさらに三つ増やし、より広いエリアでの観光開発を進めています」

隣国ホンジュラスのマヤ遺跡、コパンリナスで行われた第三国研修には、ティカル周辺集落の代表者、市役所の担当者、国立公園の代表者など全部で8人が参加し、現地での取り組みを見学しながら、ティカルで活かすアクションプランを作成した。「抱えている課題も似て

### 他地域での 取り組みを学び ティカルに活かす

さらに、18年11月にはティカルの関係者が金沢大学での研修を受けに来日する予定だ。観光開発の講義受講だけではなく、金沢大学で町おこし・村おこしを研究している地域創造学類の教員とも協力して、金沢や能登、五箇山(富山県南砺市)などを視察し、日本での町づくりの事例を体験してもらう計画になっている。

「私たちは考古学をベースに観光開発に取り組んでいますが、集落の中で仕事を作っていく、魅力的な地域にしていくといった、町づくりの視点も必要になってきます。そんなときには、金沢大学のネットワークを活用できるのも私たちの強みだと思っています」

ティカルには金沢大学のリエゾン・オフィスがあり、日本やグアテマラの協定校から学生がフィールドワークに訪れる。学生たちにとっても、異文化体験や村の人たちと協働できる海外インターンシップの場であるティカルは、またとない教育の現場になっている。

中村さんたち金沢大学のプロジェクトは、ティカルの人たちにも、日本やグアテマラの研究者や学生にもたくさんのおもてなししながら、これからも継続していく。